



BOOK REVIEW



レイチェル・カーソン 『沈黙の春』の生涯

リンダ・リア著, 上遠 恵子訳
(東京書籍 本体5,000円)

本書は、『沈黙の春』の著者レイチェル・カーソンの生涯を克明に描いた評伝である。大学で環境史を講義するリンダ・リアは執筆にあたり、ほぼ10年をカーソンの研究に費やした。カーソンの著作は言うに及ばず、メモ、日記や手紙などの膨大な資料が丹念に検証され、関わりのあった200名に及ぶ人々より取材された。その集大成である本書のページ数には圧倒されるが、内容も訳文もわかりやすく、文学作品を読んでいるようだ。

私達教育にたずさわる者が特に興味深いのは、時代への洞察力、先見性を持ち、生態系の危機を人間の危機として果敢に世間に訴えたカーソンという女性の、人間形成期の章であろう。幼少頃の自然観察、野生生物とのふれあいが、後に生物学者となり、詩情あふれる文体を書く作家の基礎体験であったことがわかる。

また大学時代、作家を志望しながら、生物学に傾斜していくプロセスも興味深く描かれている。大学時代のカーソンは科学か文学かという二者択一のジレンマを抱えていた。しかしカーソンが商務省漁業局の教育ラジオ番組の脚

本を書くチャンスを得た時、新たな可能性への扉が開かれていった。生物学、そして海洋科学の世界にはいることで、作家として書く材料を手にいれたのだ。カーソンはこの漁業局で16年近く公務員の仕事をしたが、余暇には個人的な執筆活動を行なった。精神的、肉体的な重荷で幾度か健康を悪化させながらも、海洋生物学者よりも著作活動の方を好んだ。

カーソンが農業の問題に危機感を高め、多くの専門家の協力のもと『沈黙の春』を執筆するプロセスは13章からだ。環境への倫理的意識が高まり、癌の転移その他の疾患との闘病生活の中、是非ともこの本を完成させたい強い思いが描かれている。そしてそれが達成された時、「すべての鳥やそのほかの生物、そして自然の中に存在するあらゆる美しさへの思いが、深いしあわせとともに胸中に蘇ってきました。自分ができることはすべてなした一本を完成させることができた—今ここに、この本はそれ自身、生命を獲得したのだと！」という感動的な言葉が引用されている。

リンダ・リアは、カーソンの生涯のいくつかの節目や転機を押さえ、断片的な報告に終わらず、それらをつなげてこの女性の公的、私的側面を併せた全体像を描ききった。社会的、時代的背景の記述もわかりやすい。また世代を遡っての家族背景、家の経済事情その他がもたらした苦しみ、悩み、葛藤などの内面も描かれている。

本書は巻末に掲載された資料だけでも50ページに及び、加えて人名索引、事項索引も整備され、学術書の精緻さを有する一方、カーソンの内面描写の部分では、まるで寄り添うような共感的姿勢が感じられる。

カーソンが『沈黙の春』を揺るぎない基礎の上に築きあげたように、リア

もこの女性の生涯を歴史的に検証して、揺るぎない基礎の上に再現したと思われた。

植月 千砂 (京都橘女子大学, 他非常勤講師)



世界の言語政策 —— 多言語社会と日本

河原 俊昭 編著, 岡戸 浩子・後藤田 遊子・中尾 正史・長谷川 瑞穂・藤田 剛正・松原 好次・三好 重仁・山本 忠行 著 (くろしお出版, 本体2,800円)

近年、英語教育をめぐる議論が^{かまアツ}喧しい。しかし我々日本人は、英語以外の言語教育や日本の言語環境にも、もっと目を向けるべきではなからうか。それは、今後ますます増加する在日外国人としっかりした意思疎通をはかるためにも、これまでの言語意識の転換が必要になるからである。

このような時、「社会言語学」的知見は言語教育の中でもっと認識され、活用されなければならない。「言語政策」はこの新しい学問領域の一つである。世界各地の言語政策を紹介した本書は、多言語社会に向かいつつある日本が、どのような準備を整えるべきかを考えさせてくれる。

地域は、アメリカ (松原)、モンゴル (後藤田)、フィリピン (河原)、ベトナム・ラオス・カンボジア (藤田)、オーストラリア・ニュージーランド (岡戸)、カナダ (長谷川)、イギリス